

# 卒業旅行レポート

## 29 塾 「上を向いて歩こう」

ひたすら先生に集中させて頂いた1日間であった。PJから「誰にでも頼めるわけではない」と安全係リーダーの役を依頼され、やってみよう引き受けた。75人の大勢の中でどうすれば先生に近づけるのかを考えるかわりに、トラブルが無く、期間中いかに安全に過ごして頂くかを考えるようになった。そして卒業旅行に何かを期待することより、先生に一点集中することに全力を尽くそうと決めた。

7月1日の初日から2日目頃までは気持ちが空回りしていた。安全係同士の動きの連携がつかめず、先生の周りをうろろろしてしまう。随分お目障りだったと思う。リーダーが自分で判断せず、指摘されるがまま動いたことが原因であった。経験のない自分は指示して人を動かすより、率先垂範で自ら動くほうがよい。3日目頃から落ち着いて考えられるようになった。先生の進む方向の事前安全確認に意識を注ぐ。人だかりの中では通行人と思わず鉢合せすることも。役目が務まっているか判断に迷えば、正副塾長にご意見を仰いだ。集中力が欠けそうになった時は奥様から頂戴した船に助けていただいた。

一日は先生とPJとの打合せから始まる。事前の準備はされているが、廊下で静かに指示を待つ間は白紙の心構えだ。待っているときの気持ちは旅行前に決めた「先生に一点集中」だった。安全係がお互い阿吽の呼吸で動けるようになってきた頃、PJが自分に求めたのは我慢強くやり切ろうとするこの姿だったのだと気付いた。反面、あんなにガードを固められては先生

平成15年7月16日(水)~25日(金)

フランクフルト・モナコ・パリ



に近づけないと苦情も出ていた。

7月25日、名古屋空港での最後のお見送りの瞬間までやりぬくことができた。後日、他塾のご講義にて、「非常に心配りの行き届いた旅行でした。29塾生の行動に大澤敦司の姿が見えました」とお話をされたことを知り、大きな喜びと安堵を感じずには居られなかった。一点集中することで、周りが見えなくなっていたが、実際は逆に周りがよく見えるようになっていた。先生に集中するからこそ多くのことを考える必要がある。先発隊の様子は、備品は誰が持っているのか、お食事の段取りは、塾長はどこなのか、そして、先生は今どんなお気持ちなのか。これは社業についても同じことが言えるのだろう。ポイントを外さず集中することがいかに大切か。

<第29塾 牧野仁一>

## 30 塾 「一瞬を生き切る」

4月に予定していた30塾ヨーロッパ卒業旅行が、イラク戦争によって延期。卒業前の旅行が鹿児島県「特攻の町」知覧へ2泊3日の短期決戦となった。第一回卒業旅行と塾主より名打って頂いた。7月3日朝、名古屋空港国内線。出発前の結団式、塾主から死生観のお話を頂いた。

「一瞬一瞬を死ぬ気で行動するべきである」と。そして、塾生一人一人が卒業テーマ「輝け魂」を胸に、九州へ飛び立った。初日。緊張からか全員が結団式の時頂いた言葉が行動に見えない。その夜の2次会、カラオケ。何名か歌った所で激が飛ぶ。「歌は相手の為に歌うものだ」。どうすれば良いのか、全員の動きが止まる。「即興で歌を作りなさい」と塾主。

卒業旅行の事をテーマに歌を作り披露、稚拙な歌。主客に喜んで頂く為に、何をすれば良いのか、2日目こそはと朝方までミーティングをした。

2日目朝。空は生憎の雨模様だった。しかし屋からは自分たちの不安とは裏腹に、快晴となった。知覧特攻平和会館に到着。愛する者の将来を夢見て飛び立った、若い特攻隊員の遺品を見学。遺品から隊員らの想いが伝わってくる。涙が頬を流れた。そんな中、塾主の死生観の言葉が頭をよぎった。その夜、自分たちの夢を塾主と語る場、皆が伝える事が出来ない。塾主が退室、塾長の怒声が今でも耳に残る。旅館の一部屋に塾生全員が集まり、卒業まで「一瞬を生き切る」事を誓った。

平成15年7月3日(木)~5日(土)

鹿児島県 知覧



最終日。先生から「知覧の旅行は30塾だけです」として「第2回1月の卒業旅行も楽しみにしています」との言葉を頂いた。卒業旅行のテーマ「生涯最高の旅行」の元、忘れる事の出来ない思い出となった。



私は今回の研修で「リーダーの責任は皆を幸せにする事だ」との塾主のお言葉を胸に、明日亡くすかも知れない生命を一瞬一瞬に燃やし、経営者として挑戦し続けていく事を決意した。

<第30塾 小笠原貴行>